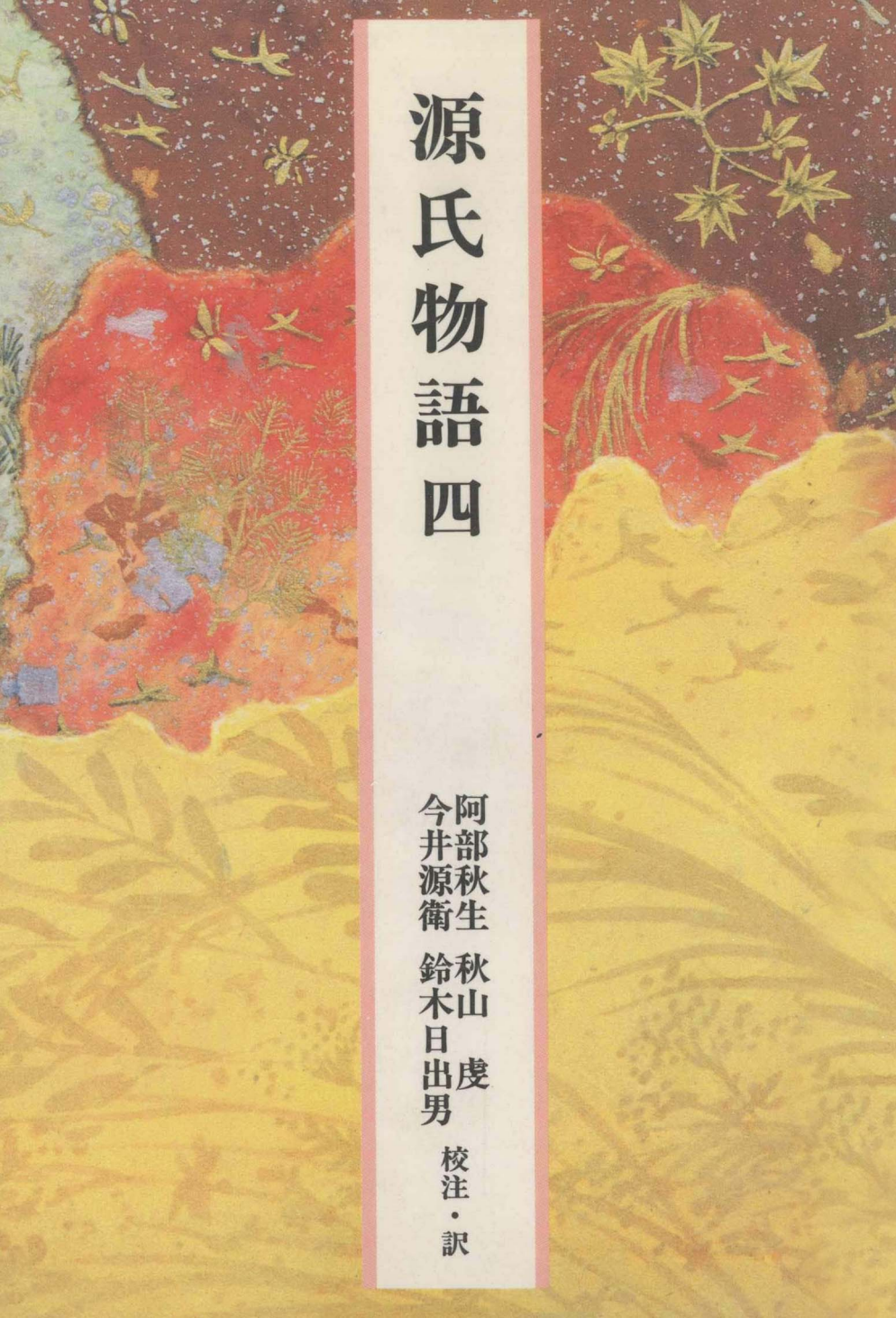




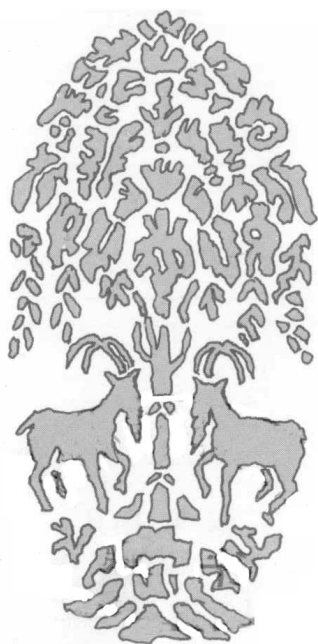
源氏物語四

阿部秋生
今井源衛
秋山 虔
鈴木日出男

校注・訳

阿部秋

・ 訳



小学館

完訳 日本の古典 第十七巻 源氏物語(四)

一九八九年四月一日 初版第二刷発行

校注・訳者 阿部秋生 秋山 虔
今井源衛 鈴木日出男

発行者 相賀徹夫

印刷所 凸版印刷株式会社

発行所 株式会社 小学館

〒101-01 東京都千代田区一ツ橋二—三—一

振替口座 東京八—二〇〇番

電話 編集(〇三)二三〇—五一四一 業務(〇三)
二三〇—五三三三 販売(〇三)二三〇—五七三九

・造本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたらおとりかえいたします。
・本書の一部あるいは全部を、無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版者の権利の侵害となります。あらかじめ小社あて許諾を求めてください。
Printed in Japan

© A. Abe K. Akiyama 1985

© G. Imai H. Suzuki

(著者検印は省略
いたしました)

ISBN4-09-556017-7

目次

凡例	三
----	---

原文 現代語訳

松風	一一	二四三
----	----	-----

薄雲	三五	二六〇
----	----	-----

朝顔	六九	二八三
----	----	-----

少女	九三	二九九
----	----	-----

玉鬢	一四九	三三五
----	-----	-----

初音	一九五	三六四
----	-----	-----

胡蝶	二二三	三七五
----	-----	-----

校訂付記	二三五
------	-----

卷末評論	三九一
------	-----

付 録

引歌一覽	四〇九
各卷の系図	四三六
地 図	四四三
官位相当表	四四四
図 録	四四六

口絵目次

源氏物語朝顔図色紙	1
源氏物語図屏風	2
源氏物語少女図色紙	4

〈装丁〉 中野 博之

凡 例

一、本書の本文は、伝定家筆本・伝明融筆臨模本・飛鳥井雅康筆本（平安博物館所蔵、通称「大島本」）等を底本とし、これを『源氏物語大成』校異篇所収の青表紙諸本と、その他数種の青表紙諸本とによって校訂したものである。河内本・別本の本文は参考として掲げるにとどめた。

一、第四冊（松風・胡蝶）の底本として初音の巻には池田本を用いた。その他の巻には大島本を用いた。各巻に使用した底本・校訂諸本は、「校訂付記」の巻名の下に略号によって列挙した。

一、本文は、底本をできるだけ忠実に活字化することを期したが、変体仮名を普通の仮名に、仮名づかいを歴史的仮名づかに改めることをはじめ、次のような操作を加えた。

1 段落を分けて改行し、大きい段落には番号と見出しを加えた。また句読を切り、濁点を加え、会話などを「」でくくり、肩書を付した。

2 宛字^{あてじ}は普通の表記に戻し、補助動詞の「たまふ」「はべり」「きこゆ」「たてまつる」などは、仮名書きに統一した。これらのほかにも仮名書きにしたものがある。

○大正し^{だいしょうし}→大床子^{だいしょうこ} 外尺^{げさく}→外戚^{げき} 五^ご→碁^ご 木丁^{もくぢょう}→几帳^{きちやう} 本上^{ほんじやう}→本性^{ほんじやう} せふ正^{せふしやう}→摂政^{せつしやう} あか

月^{つき}→暁^{あけ}

○思給る^{おもひ}→思ひ^う たまふ^へ→る 侍なり^{しやう}→はべなり・はべるなり 也^や→なり

○猶・尚↓なほ 中↓↓なかなか

3 「く」「ゝ」などの繰返し記号は用いず、文字を繰り返して表記した。また、「く」「ゝ」を「々」に改めたものもある。

○つゝ↓つゝ やうく↓やうやう

○日ゝ↓日々 人く↓人々 御方く↓御方々

4 漢語の韻尾の m・n 音の区別は決定しがたいところもあるので、原則的には n 音（ん）表記に統一したが、例外もある。

○三位（サンミ） 散位（サンニ） 汗衫（かぎま） 竜胆（りんだう）（または「りうたむ」）

5 底本に二通りの表記がある同語は、底本の形にしたがった。

○かるしーかろし（輕し） かぞふーかずふ（数ふ） うまるーむまる（生まる） うめーむめ（梅）

まなーまんなーまなむ（真字） んーむ（助動詞） なんーなむ（助詞） なめりーなむめりーな

んめり ついししょうーついそう（追従） こきでんーこうきでん（弘徽殿） じようきやうでんー

そきやうでん（承香殿） おほいどのーおほと（大殿）

一、底本を校訂した部分は、「校訂付記」に掲げ、校訂の拠りどころとした諸本の略号を記した。

一、各帖の本文冒頭にある巻名は、底本の題簽（だいせん）の文字を活字体になおして用いた。

一、脚注については、日本古典文学全集『源氏物語』の注をふまえてもいるが、なお次のような配慮のもとに執筆した。

1 簡潔・明快であることを旨とし、なおかつ脚注だけで十分本文が読解できるように心がけた。

2 本文の見開きごとに注番号を通して付け、その注釈は見開き内に収めるように心がけた。だが、スペースの関係で、時には前のページあるいは後のページの注を参照するよう、↓を付してページと注番号を示した。

3 『源氏物語一〇三』（第一冊）第三冊を参照すべきことを示す場合は、次のようにした。

○↓帚木①四九頁（本文を参照する場合） ↓紅葉賀②五七頁注三（脚注を参照する場合）

↓須磨③④（本文中の太字見出しの章段を参照する場合）

4 語釈は、スペースの許すかぎり、語義・語感・語法・文脈・物語の構成・当時の社会通念などにもふれながら、読解・鑑賞の資となるよう心がけた。

5 段落全体にわたる問題、とくに鑑賞・批評などには、◆を付して記した。

6 引歌がある部分の注は、当該引歌とその歌が収録されている作品および作者とをあげるにとどめ、引歌の現代語訳と解説とは、巻末付録「引歌一覧」に掲げた。

7 登場人物・官職・有職故実については、本文の読解・鑑賞に必要な範囲内にとどめたので、巻末付録の「系図」「官位相当表」「図録」をも併せて参照されたい。

一、現代語訳については、次のような配慮のもとに執筆した。

1 原文に即して訳すことを原則としたが、また独立した現代文としても味わい得るようにつとめた。

2 そのために、必要に応じて、(1)主語・述語の補充、(2)語順の変更、(3)会話・独白（モノローグ）・心内語・引用における「」の添加、(4)文中の言いさしの言葉には下に補いの言葉の付加などの工夫をした。

3 和歌は、全文を引用したのち、その現代語訳を（ ）内に示した。

4 見出しは、本文に付したのと同じ見出しを現代語訳の該当箇所に付けた。

5 原文と現代語訳との照合の検索の便をはかり、それぞれ数ページおきの下段に、対応するページ数を示した。

一、巻末評論は、本巻所収の巻々に関連して問題となるテーマを一つとりあげて論じた。

一、巻末付録として、「引歌一覧」「各巻の系図」「地図」「官位相当表」「図録」を収めた。

一、本巻の執筆にあたっての分担は、次のとおりである。

1 本文は、阿部秋生が担当した。

2 脚注は、秋山虔と鈴木日出男が執筆した。

3 現代語訳は、秋山虔が執筆した。

4 巻末評論は、今井源衛が執筆した。

5 付録の「引歌一覧」は、鈴木日出男が執筆した。

一、その他

1 口絵の構成・選定・図版解説については田口栄一氏を煩わした。

2 口絵に掲載した『源氏物語図色紙』については京都国立博物館の、『源氏物語図屏風』についてはデトロイト美術館の協力を得た。

源
氏
物
語

松^{まつ}

風^{かぜ}

巻名 明石あかしの君のかき鳴らす琴に響き合う「松風」により、大堰おおいの邸に移り住んだ明石の君たちの寂寥せきりょうを象徵する。「松風」

の語は、地の文にもみえ、また尼君の歌に「身をかへてひとりかへれる山ぎとに聞きしににたる松風ぞふく」がある。

梗概 二条の東院が落成し、源氏は西の対に花散里はなちりを迎え入れたが、東の対にと予定していた明石の君は、わが身の程を思うと上京の決心もつきかねている。明石の入道は、そんな娘のために大堰川のほとりにあった尼君伝領の邸を修築して、そこに娘を移し住まわせることにした。これを知った源氏は、惟光ひみつを遣わして邸の整備に当らせた。

源氏の催促で、明石の君は、姫君、母尼君とともに、ただ一人明石にとどまる父入道と惜別してひそかに上京し、大堰の邸に落ち着いた。閑寂な、明石の浦を思わせる大堰の景色は、懐かしい故郷を後にしてきた明石母子の感慨を誘うに十分であった。

明石の君訪問を願いながらもなかなか果たせないでいた源氏は、造営中の嵯峨野さがのの御堂や桂の院への所用にかこつけて、疑念を抱く紫の上をなだめすかし、ようやくのことで大堰に明石の君を訪れた。三年ぶりの再会である。はじめて対面する幼い姫君は予想以上に愛らしく、源氏は自邸への引取りを思案するが、二条の東院入りに応じようとはしない明石の君の気持を思うと、きり出すことができない。二夜を大堰に過してこまやかな契りを交すのであった。翌日は、源氏の威徳を慕って迎えに来た殿上人どのじやうにんを桂の院で饗応、月明の下に遊宴が催され、都の帝との間に歌の贈答があった。

予定を過ぎて帰邸した源氏は、不満げな紫の上をなだめるのに懸命である。子供好きで紫の上は、明石の姫君を引き取る件の相談を源氏からもちかけられて、わが手で養育したいものと思うのであった。

大堰への通いは容易ではない。嵯峨野の御堂の念仏にかこつけて、月に二度ほどの訪れであった。〈源氏三十一歳の秋〉

松 か ぜ

〔二〕二条の東院成り花散里などを住まわせる

東^{ひむがし}の院造りたてて、花散里^{はなちり}と聞こえし、移ろはしたまふ。

西^ニの対^{たい}、渡殿^{わたのどの}などかけて、政所^{まじごころ}、家司^{けいし}など、あるべきさま

にしおかせたまふ。東^{ひむがし}の対^{たい}は、明石^{あかし}の御方^{みかた}と思しおきてたり。北の対^{たい}はことに

広く造らせたまひて、かりにてもあはれと思して、行く末かけて契^{ちぎ}り頼めたま

ひし人々集^{つど}ひ住むべきさまに、隔^かて隔てしつらはせたまへるしも、なつかしう

見どころありてこまかなり。寝殿^{ねだん}は塞^{ふさ}げたまはず、時々渡りたまふ御住^{みす}み所に

して、さる方なる御しつらひどもしおかせたまへり。

明石^{あかし}には御消息^{みせうし}絶えず、今はなほ上^{うへ}りぬべきことをばのため大堰^{おおい}の邸^{やしき}を修築

まへど、女^メはなほわが身のほどを思ひ知るに、「こよなく

やむごとなき際^{きは}の人々だに、なかなか、さてかけ離れぬ御ありさまのつれなき

を見つつ、もの思ひまさりぬべく聞くを、まして何^ニばかりのおぼえなりとてか

一 二条東院造営。澤標①一〇七
に、花散里をはじめ多くの女性
を住まわせるべく構想。

二 花散里のいる西の対から寝殿
の渡殿(廊屋)などにかけて。

三 政所は家政を司る役所、家司
はその別当(長官)以下の役人。花
散里を東院の女主人として処遇。

四 以前から東院に住まわせるべ
く構想。↓澤標①一〇九、一七行。

五 源氏がかりそめにも情けをか
け、自分を頼みに思わせた相手、
の意。空蟬・末摘花・五節などの

ほか、表面に出ないが、大勢いる。
末摘花の入居は、蓬生④④参照。

六 部屋を多くの局に仕切る意。

七 「なほ」に、源氏は幾度となく
上京を促してきた意をこめる。

八 前行の「なほ」に照応。こちら
はこちらで、一貫する「身のほど」
の意識から源氏に応じかねる。

九 高貴な身分の源氏の愛人たち
縁が切れるわけでもなく、そ
れでいて冷淡な源氏の態度を。

二 「まして」以下に、上述の愛人
たちにすら比肩しえぬわが身分を
思い、上京後の不都合さを予想。

さし出でまじらはむ。この若君の御面伏せに、数ならぬ身のほどこそあらはれめ。たまさかに這ひ渡りたまふついでを待つことにて、人笑へにはしたなきこといかにあらむ」と思ひ乱れても、また、さりとして、かかる所に生ひ出で、数まへられたまはざらむも、いとあはれなれば、ひたすらにもえ恨み背かず。親たちもげにことわりと思ひ嘆くに、なかなか心も尽きはてぬ。

昔、母君の御祖父、中務宮と聞こえけるが領じたまひける所、大堰川のわたりにありけるを、その御後はかばかしう相継ぐ人もなくて、年ごろ荒れまどふを思ひ出でて、かの時より伝はりて宿守のやうにてある人を呼びとりて語らふ。入道「世の中を今とは思ひはてて、かかる住まひに沈みそめしかども、末の世に思ひかけぬこと出で来てなん、さらに都の住み処求むるを、にはかにまばゆき人中いとはしたなく、田舎びにける心地も静かなるまじきを、古き所尋ねてとなむ思ひよる。さるべき物は上げ渡さむ。修理などして、形のごと人住みぬべくは繕ひなされなむや」と言ふ。預り、「この年ごろ、領ずる人もものしたまはず、あやしき敷になりてはべれば、下屋にぞ繕ひて宿りはべるを、こ

一生母の身分の低さがあらわになれば、姫君の不面目とならう。

将来に傷がつくことを危ぶむ気持。

二「たまさか」「這ひ」に、源氏を待ち受ける日陰者の心をこめる。

三 最悪の状況を想定。

四 明石の地。ここでも、姫君の将来へのひそかな期待がこもる。

五 源氏の勧誘を受け、かえって。

六 明石の入道の妻、尼君の。

七 親王で中務卿。前中書王兼明親王を准拠とする説が有力。

その山荘も大堰川の畔、天竜寺か臨川寺あたりであり小倉宮と号した。この母方の尊貴な家系に注意。

八「やうにてある」とあり、管理人としての資格も不明確。

九 明石の地に。

一〇 近衛中将から播磨守への転出。

一一 明石の君が源氏と結ばれ、姫君が誕生したこと。

一二 「まばゆき人中」は、源氏周辺をさす。田舎に住みなれた明石の君の当座の措置として、この山荘への転居を考える。もとより源氏の勧誘に対する折衷策であった。

一三 必要な費用を送り届けよう。

の春のころより、内^{ウチ}の大^{ダイ}殿^{テン}の造^{つく}らせたまふ御^み堂^{どう}近^{ちか}くて、かのわたりなむ、いとけ騒^{さわ}がしうなりにてはべる。いかめしき御^み堂^{どう}ども建^たてて、多くの人^{ひと}なむ造^{つく}り営^{いとな}みはべるめる。静^{しず}かなる御^み本^{ほん}意^いならば、それや違^{ちが}ひはべらむ」、入^い道^{だう}「何^{なに}か。それも、かの殿^{テン}の御^み蔭^{かげ}にかたかけてと思^{おも}ふことありて。おのづからおひおひに内^{うち}のことどもはしてむ。まづ急^{いそ}ぎておほかたのことどもをものせよ」と言^いふ。

預^より「みづから領^{りやう}する所^{ところ}にはべらねど、また知^しり伝^{つた}へたまふ人もなければ、かごかなるならひにて、年^{とし}ごろ隠^{かく}ろへはべりつるなり。御^み庄^{さう}の田^で、畠^{はたけ}などいふことのいたづらに荒^あれはべりしかば、故^こ民^{みん}部^ぶ大^{だい}輔^ふの君^{きみ}に申^{まを}し賜^{たまは}りて、さるべき物など奉^{ほう}りてなん領^{りやう}じ作りはべる」など、そのあたり^{あたり}の貯^{たくは}へのことどもをあやふげに思^{おも}ひて、鬚^{ひげ}がちにつなし憎^{にく}き顔^{かほ}を、鼻^{はな}などうち赤^{あか}めつつはちぶき言^いへば、入^い道^{だう}「さらにその田^でなどやうのことはここに知るまじ。ただ年^{とし}ごろのやうに思^{おも}ひてものせよ。券^{けん}などはここになむあれど、すべて世^よの中^{なか}を棄^すてたる身^みにて、年^{とし}ごろともかくも尋^{たず}ね知^しらぬを、そのこともいま詳^{こま}しくしたためむ」など言^いふにも、大^{だい}殿^{テン}のけはひをかくればわづらはしくて、その後^{のち}、物^{もの}など多く受^うけ取^とり

四 以下、丁寧語「はべり」の多用で、下人らしい口調。

五 雑舎。荒廃した邸では、修理は主殿よりも雑舎のほうが容易。

六 源氏の嵯峨野の御堂の造営。

↓総合③一九六頁一五行。

七 入道の言葉「静かなるまじき」を逆手に、申し出を拒もうとする。

八 以下、高飛車で命令的な口吻。

九 源氏の権勢を頼みとして。

「かたかくは、寄せかける意。こちら、源氏を持ち出して反発。

云 もの静かな環境に住みなれて。

「かごこか」は、閑静なさま。

三 注七に関連して、兼明親王の次男、民部大輔伊行を准掾とする。

三 借地料など。既得の管理権を主張して、入道に迫る。

三 田畑から収穫した物の貯えなどを没収されはしないかと。

四 「つなし」は語義不明。

五 口をとがらせて、ふくれる意。

六 田宅・荘園などの証券。

七 土地や邸の所有権の問題。

八 ここでも源氏の庇護をほめ

かし、下人の抗弁をしりぞける。

元 修理費。

てなん急ぎ造りける。

かやうに思ひよるらんとも知りたまはで、上らむことをものうがるも心得ず
 思し、若君のさてつくづくともしたまふを、後の世に人の言ひ伝へん、いま
 一際人わろき瑕にやと思はすに、造り出でてぞ、「しかじかの所をなむ思ひ出
 でたる」と聞こえさせける。人にまじらはむことを苦しげにのみものするは、
 かく思ふなりけりと心得たまふ。口惜しからぬ心の用意かなと、思しなりぬ。
 惟光朝臣、例の忍ぶる道はいつとなくいろひ仕うまつる人なれば遣はして、
 さるべきさまに、ここかしこの用意などせさせたまひけり。惟光「あたりをか
 しうて、海づらに通ひたる所のさまになむはべりける」と聞こゆれば、さやう
 の住まひによしなからずはありぬべし、と思す。造らせたまふ御堂は、大覺寺
 の南に当たて、滝殿の心ばへなど劣らずおもしろき寺なり。これは川づらに、
 えもいはぬ松蔭に、何のいたはりもなく建てたる寢殿のことそぎたるさまも、
 おのづから山里のあはれを見せたり。内のしつらひなどまで思しよる。

- 一 源氏は、入道が娘たちを大堰に転居させようとの心算を知らず、上京を渡る理由に合点がゆかぬ意。
- 二 明石の田舎で、もの寂しく。
- 三 母の出目が低いうえに、さらに不面目な田舎育ちという欠点加わることになるかと。将来の立后を考えての「暇」を懸念する。
- 四 大堰の山荘。
- 五 「けり」に注意。源氏はじめて明石の人々の深慮に合点がゆき、明石の君の慎重な態度に「口惜しからぬ」と感服する。
- 六 「いろふ」は、かわりあう意。
- 七 大堰の山荘に。
- 八 源氏の通い所にふさわしく。
- 九 明石の海に似通うとする。
- 一〇 嵯峨野の源氏の御堂。
- 一一 京都市右京区嵯峨大沢町。淳和天皇の皇后が出家後、嵯峨上皇の離宮を寺としたもの。「滝の音は絶えて久しくなりぬれど名こそ流れてなほ聞こえけれ」(拾遺雜上 藤原公任)とあり、物語制作時代には滝の水が絶えていた。この御堂は、源融(嵯峨天皇の皇子)の栖霞観(栖霞寺)となり現在の清